

山梨県におけるブドウ害虫「クビアカスカシバ」
の生態と薬剤の効果山梨県果樹試験場 うち だ かず ひで
内 田 一 秀

はじめに

クビアカスカシバ *Glossosiphonia romanovi* (Leech) は、幼虫がブドウ樹の主幹部や主枝等の粗皮下に食入し、加害部位から先端側に樹勢低下や枯死を生じさせる（図-1）。幼虫は若齢のときには乳白色であるが、老齢になると桃紫色を呈し、体長4 cm程度にまで成長する（中島ら, 1978）。また、若齢幼虫では腹部末端の肛上板に特徴的な1対の鉤状突起が明確に認められるが、老熟するにつれて目立たなくなる（ARITA and HIRAO, 1991）。秋になると終齢幼虫は数 cm 程度の浅い土中でマユを作って越冬し、翌年、マユの中で蛹化して、スズメバチ類に酷似した成虫となる（図-2）。性フェロモントラップを用いた調査では、山梨県において成虫は主に6～8月に発生し、特に6月後半から7月にかけて誘殺数が多くなる（内田, 2016）。

国内におけるクビアカスカシバの分布は、北海道から

九州まで広く認められているが（ARITA and HIRAO, 1991）、ブドウでの被害は、1975年8月に大分県で確認されてから（中島ら, 1978）、2000年ころまでは大分県と大阪府のみにとどまっていた（有田・池田, 2000）。しかし、現在では全国的にブドウ栽培上の大きな問題となっている（高馬, 2009；小松, 2010；村上, 2010；伊藤, 2011）。

そこで生態解明の一助とするため、野外環境における卵期間、ブドウ樹上における産卵と食入痕の分布、ならびに、本県内で捕獲した雌成虫の産卵数とふ化率を調査した。また、本種による被害程度は、ブドウの品種によって異なるとの報告があることから（中島ら, 1978；小松, 2010）、本県における被害の実態を明らかにするため、ブドウ生産者を対象に品種ごとの被害状況についてアンケートを実施した。一方、防除対策の確立に向けては効果の高い薬剤を選抜することが重要である。伊藤（2011）は、人工飼料を用いて、薬剤を溶かしたブドウ果汁を処理した食餌浸漬法により有効薬剤を選抜してい



図-1 クビアカスカシバ幼虫（左）と被害による樹勢低下（右）（矢印はクビアカスカシバ幼虫の加害部位）

Ecology and Insecticides Effective Against the Grape Pest “*Glossosiphonia romanovi*” in Yamanashi Prefecture. By Kazuhide UCHIDA
(キーワード：クビアカスカシバ、ブドウ、カルタップ水溶剤)